
鬼の事情

小野 大介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼の事情

【Nコード】

N3352T

【作者名】

小野 大介

【あらすじ】

インターホンが鳴った。

来客かと思い、扉をあけると、そこには赤い壁が……。

（前書き）

ある日、ふと思いついた話です。

そのある日がいつかは、最後まで読んでいただけたらわかるかと。

ある日の夕方

ふいにインターホンが鳴り、来客かと扉を開けると、そこには壁があった。

「あれ、なんだこりゃ……？」

おうとつのある真っ赤な壁が目の前に聳え立っていた。目の錯覚かと思い、まばたきしながら近づいてみた。すると、

「ゴメンよ。ちよつくら邪魔させてもらうわなあ」

頭の上から声が聞こえた。

「え？ うわあっ！」

見上げれば、そこには顔があった。大きな顔だ。その上、真っ赤。壁だと思ったそれは壁ではなかった。男だ。巨体の男。見れば、その頭には二本の角が生えている。

「おつ、鬼……！？」

大きな身体を器用にくねらせながら、鬼は、我が家の狭い玄関をくぐり抜けた。

扉の外で立ち尽くしている家主をよそに、鬼は畳の上に胡坐を掻き、くつろぎ始めた。

「あ、あの……」

そつと部屋の中を覗き込み、恐る恐る、声をかける。

「ん？ おお、すまんう。今日一日だけのことやから、まあ許してえな」

鬼は鋭い牙を見せて、にっかりと笑った。

「は、はい……」

それで納得出来るはずも無いのだが、その牙の鋭さや、鬼の巨体

が見せる迫力に負けて、それ以上、なにも言えなかった。

「お、鬼が……！？ どうして……！？」

当然のことながらうるたえ、鬼の居る部屋の前の廊下を行ったり来たり。……しかし、狭い我が家。行き場が無く、気づけば玄関すぐ横のキッチンに立っていた。

そのとき、ふとあることに気づいた。

「あのう、とりあえず、粗茶ですが……」

鬼とはいえ、一応は客人。……いや、客鬼？ と、そんなこ

とはどうでもいいが、相手は鬼なのだから、機嫌を損ねれば厄介なことになる恐れもあるわけで、ひとまず安いお茶とお茶菓子ではあるが差し出して、出来る限りのもてなしをしようと考えた。

「おお、すまんのう。おまえさん、若いのに気が利くなあ」

鬼はまた笑顔を見せると、腰を軽く浮かし、湯呑みを取った。正しくは湯呑みではなく、陶器で出来たビアジョッキ。きめ細やかな泡が出来るとかいうやつである。それしか鬼の手に合うものが無かった。

鬼は、ズズウ〜ツ、と音を立ててお茶を啜り、一息ついた。

「あのう、えーっと、鬼様でいらっしゃいますでございますよね…

…？」

自分でもなにを言っているんだか……。

「ガッハツハツ！ そう怯えんでええよ。なにも、取って喰おうというわけやないから」

鬼はまた笑った。なんだか、気さくな感じのする人物……いやもとい、鬼である。

「はあ」

想像していた鬼と感じが違うので、戸惑ってしまった。

「ワシはなあ、赤鬼や。って、見ればわかるわなあ。ちよつとわけがあつてなあ、それで泊めてもらおうと思つてなあ」

お茶菓子を大きな口の中にひよいと放り込みながら、鬼は語り出した。

「このご時世やから油断しとつてなあ。隠れ家を造り忘れとつたんですよ。まさか急に親戚のわっぱ共が来るとは思いもせんかってなあ、アハハハッ」

「はあ」

なんとなく聞かなければいけない気がして、その場に腰を下ろし、鬼の話に耳を傾けた。

「それにしても、最近は便利になったのう。昔とは大違いやでえ」

「はあ……」

鬼の話は延々と続いた……。

「それでなあ、来年はなあ」

途中から、恐怖と緊張が入り混じってわけがわからなくなり、話半分に聞いていた。

それで、ふと気づけば眠っていたらしく、朝になっていた。

鬼はいつの間にかいなくなっていた。

「……………夢、だったのかな？」

いや、夢ではない。鬼が胡坐を掻いていた畳にはくつきりと跡が残っていた。重みでわずかだが陥没していた。

それに、置手紙も残されていた。

『お世話になりました。約束どおり、一晩だけ。お茶と、一宿のお礼として、おまえさんとこの邪気を持っていくわなあ。行事なんやから、ちゃんと豆まきやあ』

なかなか、達筆な字だった。サインペンで書いているが。

「……ああ、昨日は節分か」

手紙を読んで気づき、カレンダーを見て納得した。

「そういうことか……」

どうやら、あの鬼は、節分の豆まきで追い出された鬼だったよう

だ。あの言い分だと、普段は豆まきをしない家なのだろう。それで急遽、仕方なく我が家を間借りしたのだ。

「へえ、本当に豆が苦手なんだなあ」

あの鬼が来てからというものの、なんだか住みやすくなった気がする。具体的にどう？ と言われると難しいのだが、なんとなく空気が違うのだ。

隣人とのトラブルが減った。ものの考え方も変わったし、健康にもなった。あと、運も良くなった気がする。

きつと、あの鬼が、邪気とやらを持っていつてくれたからなのだろう。

一つ不満があるとしたら、畳の一部が陥没していて、たまに躓くことぐらいだ。

……ところで、ずっと気になっていることが一つある。

それはあの鬼に出したお茶菓子

あれは、近所にある和菓子屋で買った豆大福だった。

あとで確認したが、中に入っている豆は、大豆だった……。

どうやら、食べる分には問題無いらしい。

（後書き）

いかがでしたか？ 楽しんでいただけたら幸いです。

様々な方のご意見をうかがいたいので、評価や感想を頂けましたら助かります。あと、とっても嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3352t/>

鬼の事情

2011年10月9日01時50分発行